

## 第4室 楽器 展示解説

### N-107 彩絵鼓胴（さいえこどう）

伎楽に用いられたとみられる鼓の胴です。木製で、椀形の乳袋（ちぶくろ）の縁と中央に二条の、乳袋を繫ぐ棹の中程に三条の筋を造り出し、棹には複弁の蓮弁文（れんべんもん）を、その他の部分には宝相華（ほうそうげ）文をそれぞれ纏縷（うんげん）彩色で描いています。彩色の剥落（はくらく）が著（いちじる）しいのですが、N-108の「彩絵鼓胴」とともに製作当初の華やかな姿が偲（しの）ばれる、奈良時代の貴重な作例です。乳袋内部に記された墨書「三 鶉東院」は、法隆寺東院の三之鼓を意味し、当時法隆寺で「東院」の呼称がすでにあつたことがうかがえます。

### N-108 彩絵鼓胴（さいえこどう）

N-107の彩絵鼓胴と同様に伎楽に用いられたとみられる木製の鼓の胴です。中央の棹には蓮弁文（れんべんもん）を、その他の部分には霊芝雲（れいしうん）や宝相華（ほうそうげ）文を纏縷（うんげん）彩色で描いています。椀形の乳袋（ちぶくろ）の口縁近くに、魚々子（ななこ）地に花文を彫り表した六弁花形の座金（ざがね）をあしらった吊環（ちょうかん）金具を付けています。全体に量感豊かな堂々とした姿は、いかにも奈良時代らしい趣を湛（たた）えています。乳袋内部の墨書「鶉東院二」は法隆寺東院の二之鼓を意味しています。

### N-111 雞婁鼓胴（けいろこどう）

雞婁鼓は、鼓胴の両端に鼓皮をあて、頸（くび）から腹前に紐で下げて桴（ばち）で打ち鳴らす楽器で、雅楽に用いられます。キリの一材製で、やや扁平な球状に整え、両側に口を開けて内（うち）刳（ぐ）りを施し、胴の中ほどに一對の環（かん）金具を打ち込んでいます。表面には漆塗りが施され、彩色の痕跡が認められます。球体に近く古様を示しており、鎌倉時代の製作と考えられます。

### N-109 黒漆鼓胴（くろうるしこどう）

乳袋（ちぶくろ）内部の墨書から法隆寺で聖霊会（しょうりょうえ）に用いる楽器として、南北朝時代の延文2年（1357）に薬師寺伝来の三之鼓を写して製作されたことがわかります。キリ材を轆轤（ろくろ）挽（び）きで成形し、表面は黒漆塗り仕上げとして、内部は素地のままとする実用的な鼓胴です。

### N-106-1 羯鼓（かっこ）

羯鼓は、鼓胴の両端に鼓皮をあて、調緒（しらべお）で締めて組み立て、木製の台に載せ、両手に持った桴（ばち）でたたいて演奏する鼓で、雅楽に用いられます。天保13年（1842）の『御宝物図絵 追編』（ごほうもつずえついでん）では「石筒羯鼓」と記され、長らく瓦製の鼓胴と考えられてきましたが、近年のエックス線透過撮影による調査で木製であることが判明しました。鼓胴の外側に獅子（しし）・牡丹（ぼたん）を彩色で描き、両端は黒く縁取り、切箔（きりはく）で連珠文（れんじゅもん）を表わしています。

### N-106-付属 桐唐草蒔絵羯鼓台（きりからくさまきえかっこだい）

N-106-1の羯鼓を載せて演奏するための木製の台です。刳（く）り形（がた）を設けたX字形の台脚を横木で繋ぐ形式で、表面に黒漆を塗り、五七の桐と唐草を蒔絵の技法で表わしています。江戸時代に新たに詔（あつら）えられた品と考えられ、近世らしい華やかな装飾が印象的です。

### N-110 羯鼓台（かっこだい）

羯鼓を載せて演奏するための木製、朱漆塗りの台です。刳（く）り形（がた）をつけた2枚の板脚の間に天板を挟み、その両端に突起を付けています。天保13年（1842）の『御宝物図絵』（ごほうもつずえ）に本品は収載されており、一方、N-106-1の羯鼓は『御宝物図絵 追編』に収められておりますが、天板の突起の内側に刳られた窪みに鼓皮の位置がよく合うことから、これらは一具をなしていたと考えられます。

### N-105 横笛（おうてき）

龍笛（りゅうてき）とも称し、尺八とともに唐楽（とうがく）の楽器として用いられました。歌口（吹き口）と第1孔との間で2本の竹をつなぎ、7つの孔（あな）を開けています。孔を除く表面には桜の皮を巻きつける樺（かば）巻きが施されています。笛の頭端部を蜜蝋（みつろう）でふさぎ、先端には青地金襴（きんらん）を貼り、周囲に朱漆を塗っています。七弦琴（しちげんきん、N-102）などとともに法隆寺の西室（にしむろ）に伝わりました。

### N-105-付属-1 三巴紋蒔絵笛筒（みつどもえもんまきえふえづつ）

N-105の横笛（おうてき）に附属する笛の容器です。木製で、表面に黒漆を塗り、金蒔絵で三巴文を表わしています。江戸時代後期の『伽藍本尊霊宝目録』（がらんほんぞんれいほうもくろく）に「霊元院法皇御持物なり」とあるのが本品にあたりと考えられ、文事に明らかなった霊元天皇（1654～1732）遺愛の品として大切にされたことがわかります。

## N-105-付属-2 横笛付属箱（おうてきふぞくばこ）

N-105の横笛（おうてき）の収納箱です。木製で、表面に黒漆を塗り、蓋表に「御笛 法隆寺」と金蒔絵（まきえ）で記されています。蓋裏の金蒔絵銘から、元禄7年（1694）に寄進されたこと、作者は江戸の蒔絵師・小野田九郎兵衛であることがわかります。同じ年に同じ作者によって作られた箱の銘文より、本品も江戸幕府第5代将軍・徳川綱吉の生母・桂昌院（けいしょういん、1627～1705）によって寄進されたと考えられます。

## N-103 琴柱（ことじ）

琴柱は琴（こと）や箏（そう）の弦を張り、音程を調節するために使う道具です。この琴柱は形状から、新羅琴（しらぎごと）の12本の弦を張るために使用したと考えられます。形状は裾（すそ）を広げた山形で、頂上に弦を渡す溝を彫り、底面に半月形の刳（く）りを設けています。木製で、表面には漆塗りを施し、切箔（きりはく）の技法で葉のような文様（もんよう）や頂部の縁取りを表わしています。